特集 新学習指導要領で変わる指導，変わらない指導

バランスをとりながら週4時間を有効に活用する

佐藤　剛
（青森県弘前市立常盤野中学校）

1. はじめに

教員になって以来，大学や研究会で得たことを実践しようとしてきたが，週３時間という限られた時間のなかでは，教科書の内容を終えるのが精一杯であり，経験的には，次のように指導が偏る傾向にあったように思う。

① コミュニケーション活動ばかりやって基礎がおろそかになるパターン
② とりあえず基礎を押さえようとするパターン

①は，いわゆる正確性（accuracy）より流暢さ（fluency）を大事にするパターンで，教員になりたての頃の私の状況である。当時は，スキット発表，英語の歌，映画など，面白そうな活動を片っ端から授業に導入した。もちろん生徒は，はじめのうちは面白がってやるし，授業は盛り上がるが，話している英語はブロークンなことが多い。さらに，表現に広がりがなく，時間が経つにつれ生徒のノリは悪くなる。野球に例えると，とにかく実践，練習試合あるのみ。キャッチボールもできない生徒が試合を楽しんでできるだろうか？

②は，英語を指導できる時間は非常に限られているので，それならば，せめてドリルや繰り返し練習，基本文の暗唱などの基礎練習だけはしっかりとさせたいというパターンで，受験生を担当した昨年の私の状況である。確かに基礎力はつくが，何のために英語を学習しているのかという目的を持たせるのが困難である。野球でいえば，素振り，キャッチボールの練習ばかりで，その成果を試す試合がないような状況である。

それでは，週４時間になることでどのような可能性があるのかを考え，具体的な活動例を紹介したい。

2. 週４時間になることで

週４時間になることのメリットは，ずばり「バランス」であると考えている。すなわち，基礎・基本の習得と，それを実際に活用，実践してみる発表活動や自己表現活動のバランスが，よりうまくとりやすくなることである。具体的には，ドリル的な活動や既習事項の復習など，しっかり基礎・基本をおさえた上で，発表活動へ移行することができる。このように，基礎練習から発表活動へ至る段階でさらに細かくステップを踏むことにより，各段階間のスムーズな橋渡しが可能になり，基礎・基本の活動，実践の活動の両輪がしっかり機能すると同時に，つまずいている生徒への対応も可能になると考えられる。

それでは授業の流れにそったかたちで，何点か活動を紹介したい。復習の活動としては，毎時間 dictation を実践したい。これは，１年生は前の学期の教科書の範囲，２年生は１年生の範囲，３年生は１・２年生の範囲というように，既習の教科書を使った復習活動である。範囲を事前に連絡し，授業が始まると同時に教師のあとについて生徒が一緒に音読し，次に，生徒は教師の音読を聞き，音読を止めた最後の文を以下の dictation　card に書き取る活動である。

Dictation Card	
Date	Name

１年生の頃から徐々に慣らしていくことで，練習さえしてくれば，すべての生徒が取り組める活動とし

たい。生徒は自分がどこでつまずいているのかを実感できるし，また，音読への意識づけをすることもできる。

単語の導入は，現在，フラッシュカードを利用し，発音，意味の確認，発音練習をするのみであるが，特に発表語彙のレベルまで高めたい語彙については，次のように，それぞれの語彙を短文のなかで提示したり，生徒とインタラクションしたりと，さらに細かいステップを踏み，習熟を図りたい。

[先生] Enjoy. I enjoy studying English.
[生徒] I enjoy studying English.（リピート）
[先生] Oh! Really? Do you enjoy studying English? Mr.（Ms.）○○？

このようなインタラクションにより，文脈をともなった理解や，また，単語が文のなかでどのように使用されるのかという理解が可能となり，よく生徒が起こしがちな English is enjoy.（英語は楽しい）などのようなエラー防止にもつながるであろう。

実践の活動としては，音読練習の際に「置換モード」を取り入れることが有効である。これは，以下の例のように英文の特定の箇所が日本語に置換された状態の文章を英語に直しながら読む活動である。

例）Did you（好き）today's（昼食）?
Yes, I did. I（好きだった）the（カレーライス）.
（*NEW CROWN 2* Lesson 1 Section 2）

音読については，以下のように，教科書本文の語句を変えて, 自分のことについて読む（話す）活動（セルフリーディング）からスキットの発表につなげることもできる。

例）A: Did you like today's lunch?
B: Yes, I did. I liked *ramen*.
（*NEW CROWN 2* Lesson 1 Section 2）

また，ピクチャーカードや教科書の絵について，英語で表現できることを単文単位でどんどん発表する picture description から，それを組み合わせる形で，まとまりのある文章で教科書の内容を英語で発表する reproduction につなげたい。これらの活動を音読のあとにもうけることで，何のための音読練習なのかという，目的意識を生徒に持たせることが可能となる。

まとめの段階の活動においても，ただ基本文を練習して終わりではなく，以下の write-around のような活動を実施したい。これは, 1 人目の生徒が（1）アメリカ出身の生徒ができそうなこと（例：I can speak English.）と（2）次の生徒の出身国（例：I'm from China.）を記入し，次の生徒にまわす，2 人目の生徒は，前の生徒の内容を受けて，（1）できそうなこと（例：I can cook *gyoza*.）と（2）次の生徒の出身国を記入するというようなグループワークである。

前後の話が合うように，下線部に英文を，（　　）に国名を書きなさい。

Student A ： I'm from USA.
I can _____.
Student B ： I'm from（　　）.
I can _____.
Student C ： I'm from（　　）.
I can _____.
あなた ： I'm from Japan.
I can _____.
先　生 ： OK. I see.

これにより，学習している文型の形式，意味，使用の習熟や，話の流れを意識して英文を書き，また，自分の書いた英文を相手の人が読むことで，文脈を意識したライティングが可能となる。

3. 終わりに

週 3 時間という時間数のなかでは，限られた時間を何とか有効に活用しようと，内容の精選，ペアやグループワークなどの学習形態の工夫による指導の効率化, 授業と家庭学習の効果的な結びつけなど，様々な工夫がされたことは事実である。それらの工夫を生かしつつ, 生徒の英語をモニターすることで，英語の習得に，より効果的な授業の組み立てやあり方を工夫していきたい。

【参考文献】
靜哲人（1999）.『英語授業の大技小技』. 東京. 研究社.
Larsen-Freeman, D.（2001）. Teaching grammar, in Celce-Murcia, M.（ed.）*Teaching English as a Second or Foreign Language*, 251-266, Boston: Heinle and Heinle.